

## 農協主導の直販・交流施設「木の花ガルテン」の役割と課題 ～大分大山町農協の事例より～

研究員 大友 和佳子

### 目 次

- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1. はじめに            | (2) 農村・農業・食の価値の発信 |
| 2. 大分県日田市大山町概要     | (3) 地域の雇用の創出      |
| 3. 「木の花ガルテン」概要     | (4) 都市の情報を取り込む    |
| 4. 「木の花ガルテン」の役割    | 5. 「木の花ガルテン」の課題   |
| (1) 小規模農家の販路としての役割 | 6. おわりに           |

### 1. はじめに

本稿の目的は、大分県大山町農業協同組合<sup>1</sup>が運営する直販・交流施設である「木の花ガルテン」が地域農業振興に果たす役割と課題について考察し、次世代の農村の在り方の可能性について考えることである<sup>2</sup>。木の花ガルテンは、直売所、農家レストラン、喫茶店、パン工房からなる大型直販・交流施設である。近年は、福岡県や大分県内の多くの市に広域展開し、2018年現在直売所が10店舗、農家レストランが3店舗である。

写真1 木の花ガルテン



### 2. 大分県日田市大山町概要

木の花ガルテンは、内発的な地域振興運動である一村一品運動<sup>3</sup>の発祥の地である大分県日田市大山町に位置する<sup>4</sup>。大山町は一村一品運動のフロントランナーとして高い評価

1 以下、大山町農協、と記す。

2 農林水産省『平成28事業年度総合農協統計表』によれば、レストランを設置する農協は、54組合68か所（集計組合数661）である。

3 一村一品運動は、1979年に当時の大分県知事の平松守彦氏が提唱したもので、大分県下58市町村（当時）がそれぞれ、自分達の顔となる商品、これならば全国的な評価に耐えられるという商品を開発していくというもので、それによって地域（自前）の産業を興し、就業の場をつくり、若者を定着させることをねらいとしている。単なる「モノづくり」ではなく、自主的に地域づくりを進めようとする「ヒトづくり」であった点が評価されている。

4 一村一品運動が提唱された1979年当時、大分県は全国一の過疎地であり、過疎地振興特別措置法に基づく大分県の過疎市町村は、58団体中44団体（3市30町11村）および過疎経過措置団体1市という状況にあった。大山町も同様に過疎が進んでおり、前向きな地域振興策が求められてきた地域と言える。



を受けている。大山町は2005年の大分県日田市郡6市町村の合併により、現在は日田市のおよそ8割が山林によって占められている。山

**写真2 中山間地域である大山町**



林の面積は、3,621haで、耕作地は総面積の7%の320haである。人口は日田市自治会別人口統計表によると、2018年9月現在で2,683人である。

大山町の農業振興策は1960年代のNPC (New Plum and Chestnuts) 運動<sup>5</sup>（「梅栗植えてハワイに行こう」）が世界的に知られている。この運動は、中山間地域の条件不利性の克服が目的で、需要の所得弹性の高い梅栗をはじめ多品目の作物を生産・加工、さらに消費者に直接販売するシステムを作り、農家所得を増加させようとした。この取組みの土台には、地域を継続的に潤すためには地域全体の経済的な底上げが必要であるという考え方があり、農協と農家の協働の精神<sup>6</sup>が重視されている。

NPC運動を強力に推し進めた農協組合長でもあり村長でもあった矢幡治美氏の理念は「運動から一人の落ちこぼれ、落伍者も出さない。」ことで、1969年からはイスラエルの共同体キブツへの体験旅行等を開始している。このような協働の精神が木の花ガルテンの土台にある。

それでは、木の花ガルテンの概要について述べよう。

### 3. 「木の花ガルテン」概要

木の花ガルテンは、大山町全体の活性化を目指す運動の象徴的存在である。農協における総売上高57億円（2018年度）の内、18億円を占め、経営的にも重要な位置を占める。直売所や農家レストラン、喫茶コーナー、パン工房などが組み合わされており、運営主体は

5 NPC運動の目的は、全ての住民が地域社会連帯の中で健康で明るく豊かな生活を営むために必要な所得の確保を図ることであり、その基本理念として、総べての生産活動に携わる人々が、省力的、軽労働、快適労働を条件に、1日8時間、年間180日の労働基準を原則として、文化的な生活を営むに足る所得の追求を図るものとしている。その上で、農業振興について、梅と栗を基幹作目とし、他の果樹、特産作目を附加して、生産、集荷、加工、販売等一連の協働組織のもとに、一次産業収入に、二次産業、三次産業収入を加えて、農家収入の増大を図るとしている。

6 ここで言うところの「協働の精神」とは、農家と農協がより連携し地域振興をはかることを意味する。

写真3 オーガニック農園 農家のレストラン



写真4 喫茶 咲耶木花館



写真5 農家レストラン バイキング風景



写真6 直売所 農産品バザール館



写真7 パン工房



大山町農業協同組合木の花ガルテン部会である。農協正組合員578名の内、353名が部会員である。1990年に大型直売所「木の花ガルテン本店」が誕生し、次いで2001年に全国に先駆けたバイキング方式の農家レストラン「農家おもてなし料理 百のご馳走」、特產品のきのこをふんだんに使った喫茶コーナー・交流の場「咲耶木花館」が誕生、2011年には、赤米を使用したパン工房「田園」が誕生している。

木の花ガルテンの業容の推移を表1に示した。

売上は1991年には1,230万円であったが、2016年には15億8,496万1千円まで増加している。一店舗あたりの売上高を見ると、2006

年が17億7,388万円とピークとなっている。その後売上は横ばいであり、現在は一店舗あたりの売上の増加が課題である。

また1991年から2011年にかけて出荷農家数は280名から3,587名に増加。農家の手取り額も984万円から9億8,796万9千円まで増加している。雇用者数は1991年から2016年にかけて10名から162名に増加しているが、2006年の168名がピークである。集客数については、1991年から2016年にかけて1万7千人から221万7千人まで増加している。店舗の総数については、1991年の1店舗から2016年には13店舗まで増加している。

#### 4. 「木の花ガルテン」の役割

それでは、次に木の花ガルテンが地域農業振興に果たす役割について見てみよう。

##### (1) 小規模農家の販路としての役割

第一に、木の花ガルテンが果たす役割として、大規模専業農家以外の小規模兼業農家の販路としての役割がある。大山町農業の特徴に、中山間地域特有の少量多品目な生産形態があり、市場流通には適さない農家も多い。そうした農家が所得を得、生き残ることができるようにするために木の花ガルテンは誕生した。さらに、農家が家で活用しきれていらない食材なども有効活用されている。小規模生

産にならざるをえない条件不利な中山間地域の農業を支える販路として重要な役割を果たしていると言えよう。

##### (2) 農村・農業・食の価値の発信

二つ目の役割として、都市部に向けて「農村・農業・食の価値」を発信していることを挙げたい。木の花ガルテンで活用されている食材は、旬の大山町の農産物がメインであり、大山町らしさの発信が重視されている。客層の60%は福岡からで、都市部の客層をメインターゲットとしている。

写真8 梅の展示



表1 木の花ガルテンの業容の推移

	1991年	1996年	2001年	2006年	2011年	2016年
売上高	1,230万円	6億4,044万円	9億9,416万6千円	15億6,500万円	15億5,264万5千円	15億8,496万1千円
出荷農家数	280名	1,295名	2,018名	2,986名	3,587名	
農家の手取り額	984万円	5億1,235万2千円	6億3,533万3千円	9億3,200万円	9億2,211万6千円	9億8,796万9千円
雇用者数	10名		54名	168名	152名	162名
集客数	1万7千人	89万6千人	139万人	218万9千人	217万1千人	221万7千人
出店店舗数	1店舗	4店舗	6店舗	9店舗	12店舗	13店舗

出所：大友作成<sup>7</sup>

7 この表は大山町農協の三笠氏へのインタビューから作成しており、斜線部分は、把握していないことである。

現在事業は、大山町本店の他、福岡市や大分市におけるインショップも含め10店舗と3つのレストラン部門を展開している。ガルテン内には、大山町を象徴する梅の展示や、農業の大切さを訴える書籍などを販売している。単なる農作物の取引だけでなく大山町の文化や農業の大切さを伝える場所であることも重要な役割である。

大山町農協で木の花ガルテン事業に関わる理事参事三箇氏へのインタビューによると、

「日本の中山間地域農業は国土の保全という観点から重要です。木の花ガルテンは、条件不利地域における新しい農業の在り方を提案していると言えます。大山町らしさを生かした農業を、都市住民と共に作っていきたいと考えています。」という思いが示された。

木の花ガルテンは、都市住民を中山間地域に呼び込み、農村・農業・食の価値を伝えるシンボル的な役割を果たしている。

**写真9 農家のもてなし料理**



### (3) 地域の雇用の創出

次に木の花ガルテンで提供する農家レストランの食事は、地元農家の主婦達が提供しており、雇用を生み出している。料理の内容は、旬の農産物や山菜を使用した、地域に伝わる農村の伝統料理である。料理を調理しているのは農協の組合員である農家の主婦で、6人～10人である。

全体の経営力の向上のためには、メニュー企画等の面での人材育成が必要となっている。農協が主導している施設でもあるので、農家の知恵や主体的な参加をいかに引き出すか、という点が重要となっている。

### (4) 都市の情報を取り込む

木の花ガルテンは、条件不利である中山間地域において都市住民との交流から都市の情報を入手する場所としての役割も果たしている。そのために、通常のファミリーレストラン等との差別化のために、きのこカレーに特化し高級感を演出した喫茶店を設営するなどの工夫をし、都市部の富裕層を呼びこんでいる。従来の直売所等は安価であることが売りの場合が多いが、木の花ガルテンでは洗練されたおしゃれな空間を演出する、高級感を出す、といった戦略が取られている。

## 5. 「木の花ガルテン」の課題

こうした、中山間地域農業者の所得の向上、都市の人々に対しての農業や食の価値の情報発信等の役割を担う木の花ガルテンであるが、課題もある。

一つ目は、2009年以降横ばいの売上であるが、売上増加を可能にするにはさらなる農業生産の拡大による販売量の増加が必要である。

二つ目は、木の花ガルテンの成長を支えてきた土台にある農協と農家の連携の維持強化

である<sup>8</sup>。木の花ガルテンの歴史を支えてきた土台には、農協と農家、地域コミュニティ自身の強い協働の精神がある。この基盤の強化は今後の重要な課題と言える。

## 6. おわりに

以上の内容を受けて、次世代の一つの農村の在り方の可能性について考えてみたい。木の花ガルテンでは、地域農業の特性に合致した販路の創造、地域コミュニティの連帶、地域農業の価値の発信、都市との関係の強化等が重視されてきた。そして、現在直面している課題は農協、農家双方における農業生産力拡大のための担い手の確保と育成、協働の精神の強化と言える。

次世代の農村の在り方を一言で表現することは難しいが、地域を担う次世代を確保し育成することのできる次世代型地域コミュニティの創造が求められているのではないか。

木の花ガルテンは、中山間地域に立地しているため、役割や課題が全ての農村に参考になるとは言えないが、今後の議論の一助になれば幸いである。

### (参考文献)

- [1] 平成28年事業年度 総合農協統計表, 平成30年4月 農林水産省
- [2] 「大山町史細見：一村一品運動のモデルはいかにして形成されたか」(2014年), 金城学院大学論集 社会科学編 第11巻第1号, p 9
- [3] 同上, p21
- [4] 「全国に先駆けた直売所、農家レストラン活動から再び人材育成へ始動開始」(2017), 小幡展弘, 農業と経済, 株昭和堂
- [5] 「農協直営直売 木の花ガルテン－地域振興への情熱が農産物流通の新たな道を拓く」

(2008), 商業界

- [6] 「第1部 地域振興と一村一品運動 第2章 地域振興における農協の役割」『一村一品運動と開発途上国：日本の地域振興はどう伝えられたか』(2006), 原島 梓, アジ研選書, 日本貿易振興機構アジア経済研究所

---

8 この内容については、2018年5月に実施した大山町農協 理事参事三笠氏へのインタビューを基に作成している。